

身近なまちの風景物語(29)

慈しむ活着

初めて見た時は、うわっというより、うおっという感じだった。カーブする道の行く手に忽然と城が現れた。住宅の背後から、こちらを睨むように聳^{そび}えていた。

近づくとつれ、目の前に巨大な建造物が襲いかかってきた、ように思えた。しかしこれは城ではなかった。

ぽっかり開いた入口から吸い込まれるように入ると、そこは交流施設だった。常総市に建つ地域交流センターである。1~2階に多目的ホールや図書館、上階には地域の歴史や産業の展示室など、そして最上階の7階は展望室になっている。

こうした公共施設が天守閣のような外観になっていた。室町時代から戦国時代にかけて、この旧石下町の当地には豊田城があったという。その時代の城は、こうした意匠ではないし、このように高層でもない。復元という志向はない。

全国には民間企業が社屋として、あるいは観光施設として建てられた天守閣風の建造物がある。史実に基づかない模擬天守閣は批判されることもある。この施設も建設時には賛否があったという。

大阪城の模擬天守閣は市民の浄財をもとに建てられた。確たる史料に基づいた設計でもなく、鉄筋コンクリート造である。こうあって欲しいという願望の結晶としての意匠だった。ただこの建造物は登録有形文化財として認められた。大阪市民の共有財産になった。

この交流センターは高さが50m近くもある。全国で現存する12天守のうち最も高い姫路城天守よりも高い。ちなみに東京ディズニーランド®のシンデレラ城は約51mの高さであり、ほぼ同じである。

周囲に高い建物はなく、足もとには駐車場、周囲には農地が広がる。遠くからでも突出しているその姿が目に入る。

初めて見た時は仁王立ちする城だったが、何度か見るうちに、優しく微笑んでくれているようにも思えてきた。地域の人たちにとっては見慣れた存在として愛着のあるランドマークになっているに違いない。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程1年）